

「 恕 」

校長 前田 達彦

皆さんもよく分かっていることですが、いじめや暴力、誹謗中傷、そして、ハラスメントなど、人の尊厳を傷つける行為は、決してあってはなりません。

いじめについては、先般5月14日に本校体育館で「いじめ根絶集会」を行いました。皆さんは時間をかけて話し合い、「本校からいじめをなくそう」という思いを共有し、それぞれが決意を新たにしました。まだ記憶に新しいと思います。

その中で、特に印象に残っている言葉があります。「自分がされて嫌なことは、決して人にしない。」この言葉は、多くの班から繰り返し聞かれました。私は、その言葉を皆さん一人ひとりが意識し、実践してくれるのなら、この学校からいじめやハラスメントは、決して起こらないと信じています。今も、その思いは変わっていません。

ここで、皆さんに少し考えてほしいことがあります。例えば、必要もないのに身体に触れられる、抱きつかれる、手を握られる、必要以上に近づかれる、人と人との距離感が保たれていない。また、容姿や体型、服装などについてからかわれたり、性的な内容を含む冗談を言われたりする。そのようなことをされたら、皆さんはどう感じるでしょうか。人によって感じ方は違います。「これくらい大丈夫」と思う人もいれば、「嫌だ」「怖い」「やめてほしい」と感じる人もいます。悪気はなかったと思っていても、相手が嫌だと感じ、傷ついているのであれば、その言動は決して軽く考えてはいけません。

大切なのは、相手がどう受け止めたかです。自分では気づかないうちに、相手を苦しめてしまうことは、誰にでも起こりうることです。だからこそ、自分の言葉や行動を振り返り、相手の立場になって考えることが大切なのです。

一文字の漢字を皆さんに紹介します。「恕」です。今からおよそ2500年前に生きた中国の思想家である孔子は、多くの教えを残しました。その教えは『論語』という書物にまとめられています。

ある日、弟子が孔子に尋ねました。「一生を通して大切にすべきことを、一つの言葉で表すと何でしょうか。」すると孔子は、「それは『恕』である」と答えました。「恕」とは、思いやりの心です。『論語』には、「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」という言葉があります。今の言葉で言えば、「自分がされて嫌なことは、人にしてはならない」ということです。相手の立場に立って考えること。相手の気持ちを想像すること。

思いやりを持って行動すること。私は、この「恕」の心こそ、人として最も大切なものだと思っています。勉強も、部活動も、資格取得も、知識や技術を身に付けることも、もちろん大切です。しかし、それらは思いやりという、人としての「土台」があってこそ、本当に価値あるものになります。人を傷つけながら得た成果に、本当の意味での価値はありません。



知らないうちに相手を傷つけてしまうことがないように、今日を一つの機会として、自分の言葉や行動を振り返ってください。そして、相手を尊重し、思いやりを持って行動してください。

皆さん一人ひとりが「恕」の心を大切にして学校生活を送ることが、安心して学べる学校につながります。誰もが安心して過ごせる学校を、皆さんと一緒につくっていきたいと思います。

(第1学期全校集会 校長講話より抜粋)